

被災地の未来をになう〈ひとづくり〉

—〈気仙〉の伝統を未来につなぐ「(仮称)気仙学校」の実現をめざして—

職業能力開発総合大学校東京校 秋山 恒夫

1.はじめに

東日本大震災では、岩手県南部の沿岸部も甚大な被害を受けた。この地域は古くから「気仙」地域(旧気仙郡、現在は大船渡市、陸前高田市、住田町で構成)と呼ばれ、一心同体の歴史と文化を持つ(図1)。



図1 岩手県「気仙」地域

大津波によって街の中心部や沿岸漁村が甚大な人的・物的被害を受け、出稼ぎ大工として全国的に著名な「気仙大工の里」も、多数の伝統建物が流失、工務店や職人、訓練校が被災し、気仙の伝統文化の継承が大きな危機にある。

筆者らは、震災前から何度かこの地域に出入りして来たことから、当地域の復興応援の一環として、気仙大工の伝統を継承すると共に、気仙の市民が集い新たな文化の創造をめざす「(仮称)気仙学校」の立ち上げ構想を現地に提唱し実現をめざしているもので、概要を報告する。

この構想は、地域の未来を拓く「ひとづくり」を目的とするが、実際の仕事との連動が不可欠なことから、復興まちづくり等の「仕事づくり」と連携し、既存制度を越えた新たな学校スタイルを追求するものである。

2.気仙地域の概況

(1)「気仙」地方と「気仙大工」

この地域は、平安初期の『日本後紀』に「気仙郡」として地名が登場するように、古代(海の幸や塩を内陸に運ぶ「塩の道」、平泉の黄金文化を支えた「産金遺跡」等)から、中世、近世(仙台藩、「気仙杉」とソマ師、北前船を作った「気仙船大工」等)、近代(出稼ぎ大工等)へと長い歴史を持っている。

平地が少ないため農漁業は小規模で、出稼ぎを江戸期から始め、気仙大工の出稼ぎ範囲は、鉄道が通ってからは、東北から、北は北海道、樺太(戦前)、南は関東までに及び、出稼ぎ先へ定着する人、戻って来る人等様々であったと言う。

彼らは各地に著名な建物を残す一方、戻る時には「故郷に錦を飾る」気持ちで、修得した技量を披露し、技を競い合った。そこから、人と同じことはやらない、独自の創意工夫を重ねる進取気鋭の精神が生まれたという。

彼らの卓越した技量は、寺社から民家まで、彫刻や建具まで、何でもこなす所にあった。独特の木組み(巨大な入母屋屋根、太い骨組み、長大な桁、何段もの重ね梁、大きな火打ち梁/枕梁、持ち出し式のせがい造り、反り軒、扇垂木等)の他、豪快で繊細な「気仙左官」の技も多く見られた(図2)。

大工の出稼ぎは、高度成長期まで、半農半工の季節出稼ぎとして盛んだったが、1973年オイルショック以降激減し、現在は通年専業型の「型枠大工」が主と言う。

地元では出稼ぎをやめてから技量も低下、金物・

プレカットも使用、木造建築より土木が主流、後継者も激減したと言う。

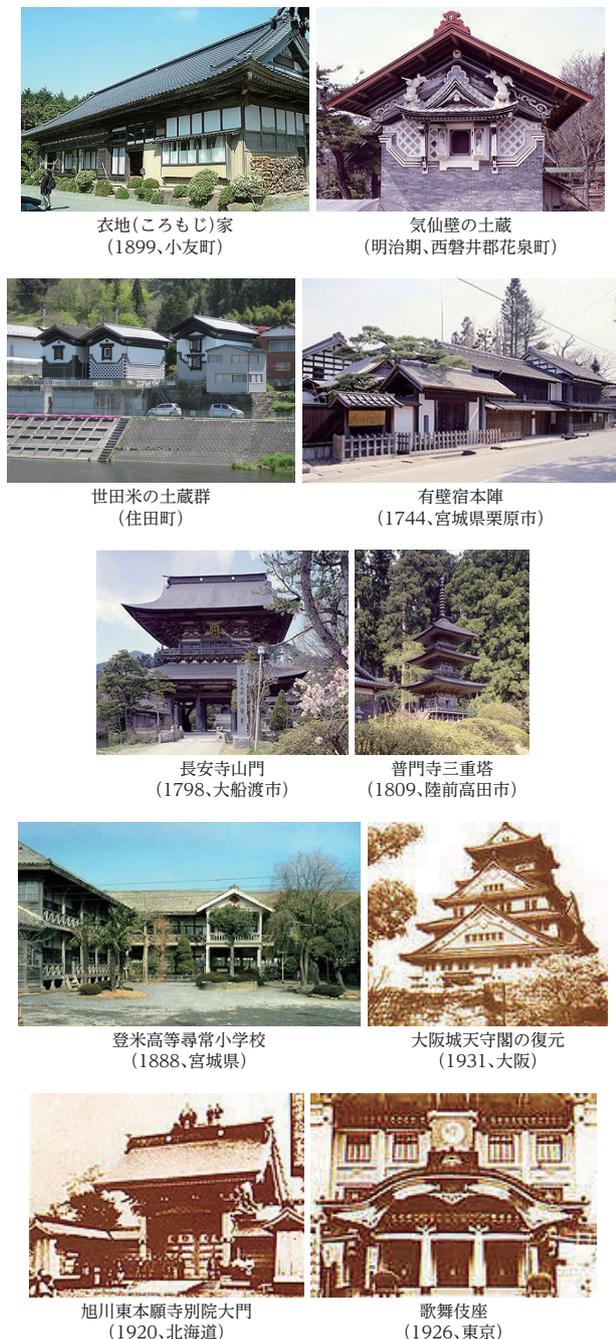


図2 気仙大工建物の事例

(2) 気仙地域の被災

今回の震災で、陸前高田市は7～8割、大船渡市は2～3割が壊滅した(図3)。死者・行方不明者約2,300人、避難者約19,000人、損壊家屋約7,000戸、仮設住宅約4,000戸(他に民間借り上げも)という甚大被害が出た(図4)。

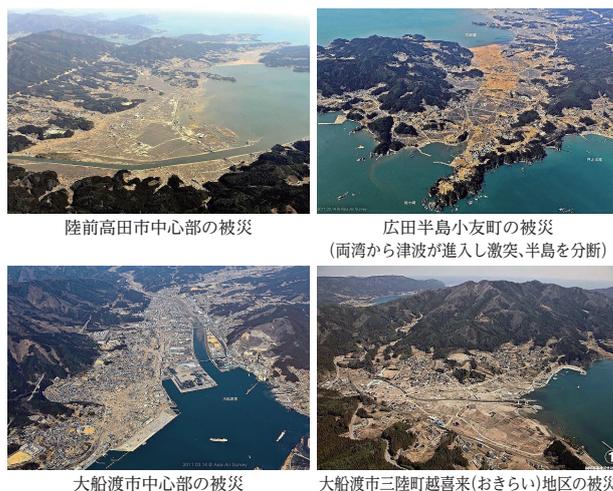


図3 気仙地域の被災状況 (2011/3/14、写真提供：アジア航測)

	大船渡市	陸前高田市	住田町	計
人口(H22.3)(人)	40,738	24,246	6,294	71,278
死者・不明者(人)	427	1,852	13	2,292
割合	1.0%	7.6%	0.2%	3.2%
世帯数	14,814	8,086	2,162	25,062
全壊・半壊(戸)	3,629	3,341	0	6,970
割合	24.5%	41.3%	0.0%	27.8%
避難所(箇所)	55	84	1	140
避難者数(人)	8,437	10,143	4	18,584
割合	20.7%	41.8%	0.0%	26.1%
仮設住宅(箇所)	39	53	3	95
仮設住宅戸数(戸)	1,811	2,168	93	4,072

図4 気仙広域圏の被災 (2012/1 岩手県発表等から集計：秋山)

気仙大工建物も、重要文化財、民家、寺社等、多くが流失した(図5)。工務店等の建設業者も多数被災し、陸前高田では約4～5割の事業所建物が流された。

細々と続いていた訓練校も3校全校が被災した(図6)。「大船渡職業能力開発センター」(県立訓練校)は冠水し、老朽化のため解体。人が集まらないので二戸校に統合の動きも出ている。「気仙高等職業訓練校」(認定訓練校、大船渡市)は浸水し、再開したが、木造科は生徒が集まらず既に数年前から休科、現在は社会人向け短期訓練のみ。「陸前高田高等職業訓練校」(認定訓練校、陸前高田市)は、市から借用していた木造廃校舎が完全流失した。県では2013年度建設補助の方針だが、先行き不明である。

その他、気仙大工の技能継承への取組みとして、「木造伝統技能者育成講座」(中堅大工対象、第2期2009～11終了)も行われていたが、今後不明である。



吉田大肝入家
(1802、気仙町、流失)

八木澤商店
(創業1807、気仙町、流失)



丸枡家
(1954、気仙町、流失)



矢作町の民家
(矢作町、浸水)



納屋家(漁師網元居宅)
(1884、三陸町越喜来崎浜、浸水)



図5 気仙大工建物の被災例



陸前高田高等職業訓練校
(認定校、陸前高田市、1958開設、流失)



県立大船渡職業能力開発センター
(県立校、大船渡市、1949開設、冠水・解体)



気仙高等職業訓練校
(認定校、大船渡市、1958開設、浸水)



木造伝統技能者育成講座
(気仙大工育成協議会、県立校を利用、第2期2009～2011終了、大船渡市)



図6 気仙の訓練施設の被災 (3校全校が被災)

(3) 復興への動き

今回の震災で、住田町の「木造仮設住宅」へのいち早い取組みが全国から注目された。住田町は内陸にあり「林業日本一」をめざし、震災前から仮設住宅輸出を計画していた。震災3日後、「気仙は同じ仲間」との町長の即断で町内に仮設建設を決定、その後、福島・岩手で地元貢献のために発注された木造仮設住宅建設(約7,000戸)の火付け役になった。

その他、奇跡的に助かった気仙船大工作の「気仙丸」、全国の話題になった「高田松原の一本松」、夏に開催された「復興まちづくりイベント」、子供や市民・専門家が参加した「こんなまちになったらいいな発表会」、被災企業が集まって結成したコミュニティカンパニー「なつかしい未来創造(株)」、地元や外部支援者によるNPOなど、様々な動きが起きている(図7)。



奇跡的に助かった気仙丸
(2011/3、大船渡市)



高田松原に残った一本の松
(2011/3、陸前高田市)



住田町の木造仮設住宅
(2001/5、全国に先駆けて建設)



復興街づくりイベント
(2011/8、陸前高田市)



こんなまちになったらいいな発表会
(2011/9、陸前高田市)



なつかしい未来創造(株)
(2011/10、陸前高田市)

図7 気仙の復興への動き例 (WEBより)

復興計画は、大船渡市が2011/10、陸前高田市が遅れて2011/12に策定、地区説明会等を経て具体化の運びにある。復興の目玉として、「気仙広域環境未来都市」構想を政府に申請、12月採択決定され、今後、復興への弾みが期待されている。

(4) 被災前の状況

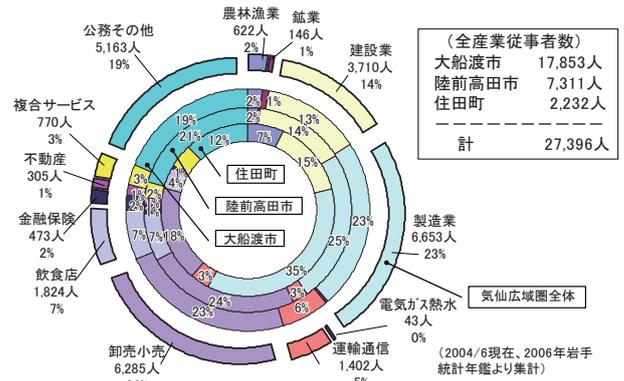
被災前、人口は3市町あわせて約7万人。地域に大きな産業はなく、高齢化が進行（60歳以上が約4割）。若者は外へ流れ、人口は減少の一途であった。3市町で「気仙広域連合」を結成しているが、有効な対策を打てないで来た。

産業は、大船渡市はセメントや木材加工の製造業を誘致、陸前高田市は観光等以外特になく、住田町は林業のみであった。従事者の内訳は、第一次の農林漁業はわずか2%のみ、建設業は約14%とやや多い（図8(1)）。

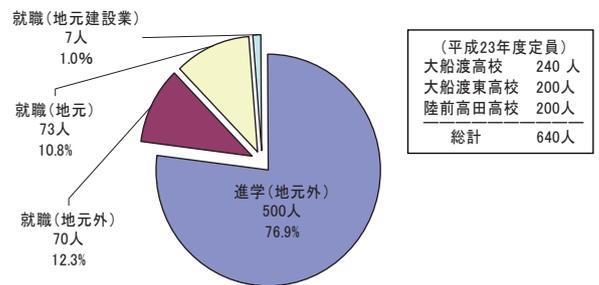
若者は、毎年高校生約650人の約77%が外へ進学。就職者は地元有力企業がないため過半は外へ出てしまい、地元に残るのは半数の80人のみ。建設業は求人がないため数人程度で、後継者はほとんどいないと言う（図8(2)）。

訓練校の入校生は毎年数名のみの状況であった。かつて出稼ぎが盛んな頃、陸前高田では別に「市立専修職業訓練校」(中卒対象)もあったが1982年に休校した。その後、「気仙高等職業訓練校」(認定校、大船渡市)は普通課程を休科。「大船渡職業能力開発センター」(県立校、大船渡市)、「陸前高田高等職業訓練校」(認定校、陸前高田市)とも、かろうじて毎年数名のみという状況であった。訓練校は、以前の方法では、募集・運営が厳しいと予想される（図9）。

震災後、外への流出が増えているが、地元に残まろうという人も多いと言う。2011/11/1時点で、陸前高田市で1,177人、大船渡市で691人が流出。実際はもっと上回り、3県平均では流出者の8割が30代以下との報道もあった。

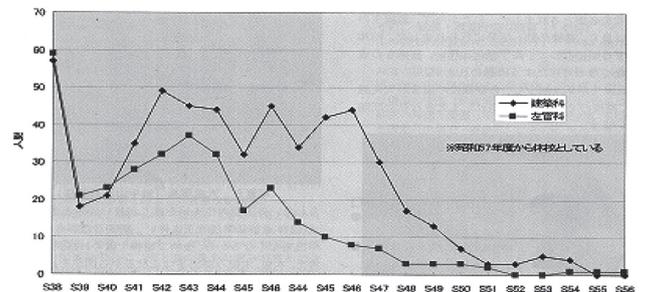


(1) 産業別の従事者数(2004/4)

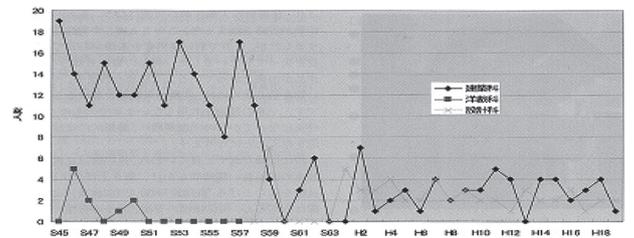


(2) 高卒者の近年の進路動向(被災前)

図8 気仙広域圏の被災前の状況(作成:秋山)



(1) 「陸前高田市市立専修職業訓練校」の訓練生数の推移 (市立訓練校、1982年休校)



(2) 「陸前高田高等職業訓練校」の訓練生数の推移 (認定訓練校、2011年流失)

図9 陸前高田市の訓練校の状況(資料提供:藤原出穂氏)

3.「気仙学校」の構想

上記の様な状況を踏まえ、本構想では、「地域の未来を担う〈ひとつづくり〉」と「新たな産業振興による〈仕事づくり〉」を連動させた仕組みの創出をめざす(図10)。

1) 新たな学校は、以下のような理念を含む方向をめざす。

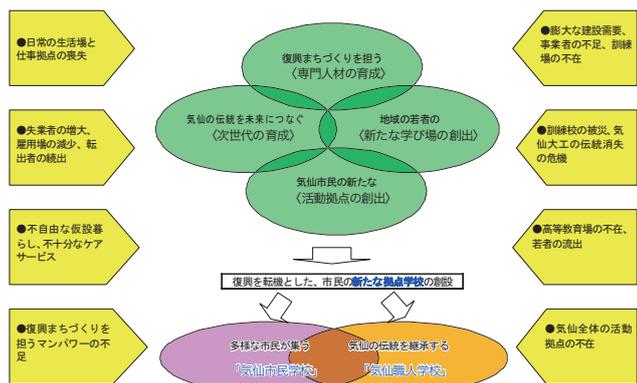
- ① 気仙大工の伝統技能を継承し、ジリ貧化する訓練校の立て直しを図る。そのために、既成の縦割り制度を越えた新たな学校スタイルを追求する。
- ② 復興まちづくりを担う地域の専門人材が圧倒的に不足しており、地域の明日を担う人材を育成する。

③ 地域に進学先がないことから、若者に魅力ある学び場又は継続教育等の場を用意し、地域に根付く仕掛けを考える(当面、卒業資格が取れる専門学校等)。

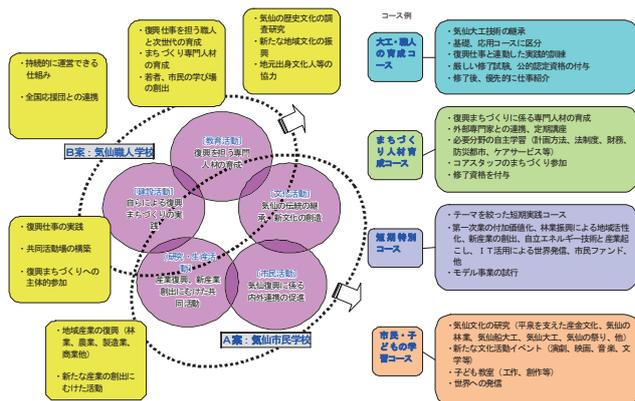
④ 全住民が集い学ぶ場がないことから、市民の新たな学習活動拠点を構築する。

2) 職人向けの「職人学校」だけでは間口が狭く、市民や社会の関心の広がりが期待できないため、市民全体を含み、「職人学校(コース)」と「市民学校(コース)」の両方を視野に入れ、可能な部分からの試行・実現をめざす。

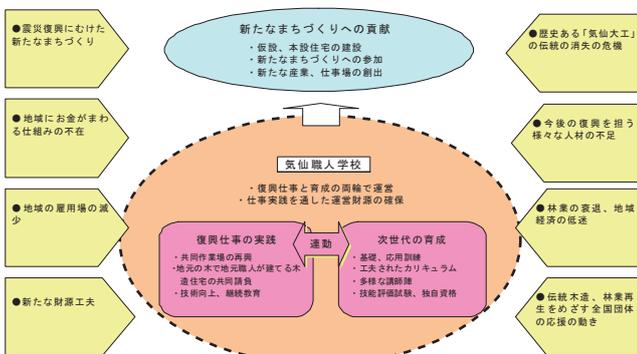
3) 「職人学校(コース)」では、既成制度にとらわれず、「入口(募集)ー実践的訓練ー出口(就業)ーフォロー」まで、魅力的な仕組みを構築する(革新的カリキュラムと指導陣、出稼ぎのない時代の



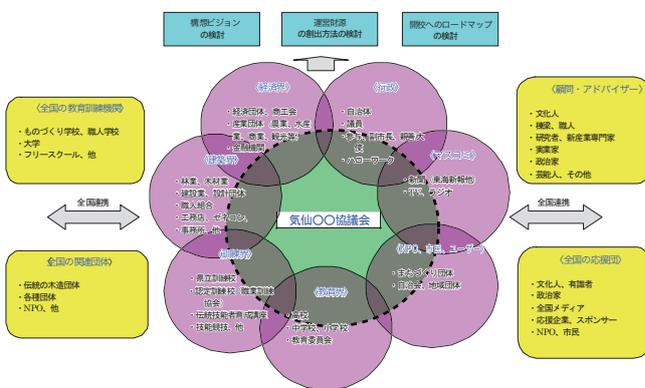
(1) 気仙の未来を担う「(仮称)気仙学校」の位置づけ



(2) 「気仙学校」の2つの方向性イメージ (A案:市民学校、B案:職人学校)



(3) 復興仕事と連動した「職人コース」のイメージ (実践的育成と運営財源の確保)



(4) 実現にむけた地元の協力体制のイメージ(協議会等)

図10 「(仮称)気仙学校」の構想イメージ案(2011/10現地へ提案)

外部刺激の組み込み、修了後の独自資格の創設と活用等)。各地で展開中の実践的な職人学校の事例も参考にする(図11)。

- 4) 職人学校は、膨大な復興仕事と連動させ、実践的育成と独自の運営財源の確保をめざす(在学中に建設実践、熟練指導者の下に学校が仕事を請け負い、一部を運営財源にまわす等)。
- 5) 「市民学校(コース)」ではどのようなものが期待されるか、協議しながらコース・内容を固める(復興まちづくりを担う専門家の育成、再生エネルギーや新産業に関する研究、市民の文化教養の拡大、高卒生の進学・学習場他)。
- 6) 市民学校は、既存の「きらめきケセン大学」や、今後生まれる様々な活動とも連携し、社会・市民基金、助成等様々な財源組合せを工夫する。
- 7) 実現への最大のバリアは、既存制度に代わる新たな財源確保の仕組みと市民社会の支援で、震災を契機に生まれた全国との連携も追求する。



図11 在学中に建設実践を行う全国の職人学校の例

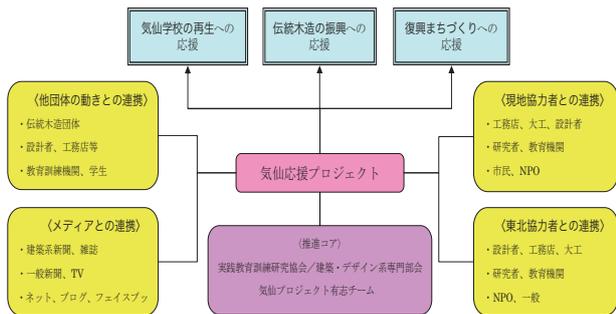


図12 気仙応援プロジェクトの推進体制案

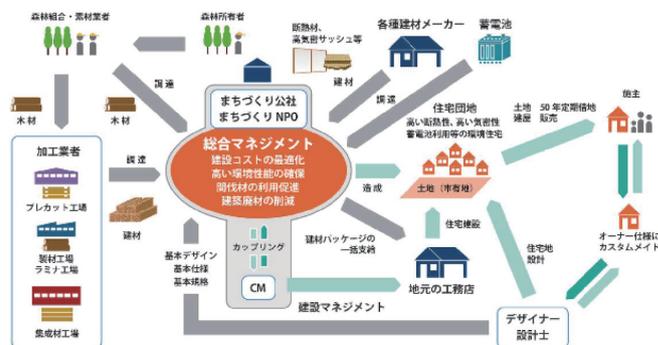
4. 「木」をキーワードとした新たな仕事づくり

学校構想は、実際の仕事なしに成り立たないことから、上記と連動した「仕事づくり」をめざす。

- 1) 膨大な復興住宅や公共・民間建物の需要を視野に入れる(仮に復興住宅建設費1,500万円/戸として、4,000戸×1,500万円=約600億円もの膨大な市場が想定される)。
- 2) この需要に地元業者だけで対応できないが、地元が参画し地元にお金が落ちる仕組みを追求する(外部業者や住宅メーカーの草刈り場となることを避ける)。
- 3) 「気仙大工」の伝統と、住田町を核とした「林業」をテコに、産業活性化と雇用の拡大を図る(復興住宅需要、大型木造、バイオマス等の多方面利用、国内、アジア等も視野に入れた展開等)。
- 4) 伝統を継承し未来に発展させるために、現代的構法だけでなく、気仙大工の「創意工夫」の精神



(1) 「気仙広域環境未来都市」の連携イメージ



(2) 「木造環境住宅団地開発」事業モデルのイメージ

図13 「気仙広域環境未来都市」構想
 (「気仙広域連合」提案、2011/12採択決定)

を生かし、木組みによる「伝統木造」を応用展開する（取組みが遅れる天然ムク材による大型木造、防火等の研究開発）。

- 5) 地元側の建設供給体制を整備し、様々なタイプ建物を開発する（気仙型モデル住宅、公共大型木造等）。
- 6) 地元と全国応援団が連携し、幅広い協力体制づくりを推進する（図12）。
- 7) 今後具体化する「環境未来都市」構想と連携する（地元林業を生かした文字通りの「木のまち」の実現、新たな産業と復興まちづくり、再生エネルギー住宅等）（図13）。

5. 現地との話し合い、今後に向けて

震災後、5月と10月に現地に赴き、多数の方々と個別に話し合った（両市長、商工観光部、訓練校、工務店、事務所、第3セクター住宅会社、気仙大工研究者等）（図14）。

現地の方々は目先のことで精一杯で、先が見えない様子であった。行政は職員を相当数失った上に、膨大な仕事に手が回らず、建設業者は多くが被害を受けて手数が足りず、今後を考える余裕がないというのが現況であろう。

地元を受け皿体制がない（かつて大工組合があったが現在は職人組合なし）ことから、まず地元が結束し共同で仕事を進める協議会体制の構築が課題と感じられた。

そこで次回2月は、テーブルを囲んで、現地側の体制づくり、気仙学校構想や様々な建物モデルの具体的提案等について話し合いを行い、可能な所から試行できればと考えている。

このプロジェクトは中長期にわたるもので、試みは始まったばかりである。見通しは不定だが、現地と協働し、多くの方々の熱意や力を集めながら、信念を持って前へ進めればと考えている。

震災を契機とした、東北各地域の飛躍と新たな文化の創造、世界への発信が何より待たれている。



図14 地元関係者との面談（2011/10訪問時）

【参考サイト、文献等】

- (1)「岩手けせん／匠の里」ホームページ（岩手県建築士会大船渡支部、監修：平山憲治）
- (2) 気仙地域の被災と復興に関する報道、ブログ等（特に、地元の「東海新報」等）
- (3)「気仙広域環境未来都市」構想（内閣府「環境未来都市」ホームページ）
- (4) 秋山恒夫「被災地の未来を担うひとづくり」(日本建築学会シンポジウム『東日本大震災からの教訓、これからの新しい国づくり』梗概集、(社)日本建築学会、2012/3)